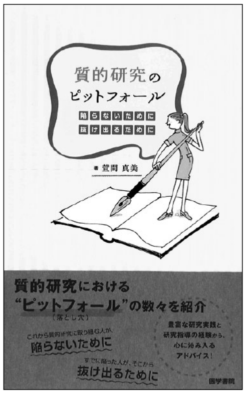
BOOKS 書評

評者：秋元典子　岡山大学大学院保健学研究科

『質的研究のピットフォール 陥らないために　抜け出るために』

一体感のあるストーリーで見えてくる質的研究の本質



著：萱間真美／定価：本体 2,000 円＋税
発行：医学書院／ TEL：03−3817−5657

何とも愛らしいイラスト入りの，質的研究に関する書籍が刊行された。指導者を含め質的研究に取り組んでいる者が，質的研究に潜む落とし穴に落ち込んでしまわないように，落ち込んだとしてもそこから抜け出せるように学術的にガイドしてくれる，小さいながらも存在感のある 1 冊である。

手に取った瞬間から，一気にその内容の的確さとクリアカットな文体に引き込まれてしまうこと間違いなし，と確信する。

『chapter 1：テーマを決めるのがむずかしい』から始まるが，すでにここから読者は「はい，とってもむずかしいです。テーマって，どうやって絞っていけばいいのですか」と著者に尋ねたくなり，『chapter 2：研究計画を立てるのがむずかしい』で，自分の苦しさをわかってもらえているような感覚を覚え，『chapter 3：むずかしくない Mixed Method』で，「えっ，そうなの？ 私にもできるかもしれない」と勇気がわき，『chapter 4：データ収集がむずかしい』では，少し勇気が出てきた背景もあって，むずかしいけれどデータ収集のヒントが書いてあるに違いないと探求したくなり，『chapter 5：分析がむずかしい』にいたっては，「まったく同感！ データ分析ほど苦しいものはない」との気持ちが読み手に行を追わせる。『chapter 6：論文を書くのがむずかしい』では，書くことは誰にとってもむずかしいのだと，最後にもう一度勇気がわいてくる。質的研究に取り組む者が間違えやすい事柄を埋もれさせることなくすべて掘り起し，読む者にとって一体感さえ感じられるストーリー性のある素晴らしい構成となっている。

読み終えたとき，いつの間にかたくさんの付箋が貼り付けられていた。1 行 1 行が意味深く，まったく無駄がないからである。とりわけ『chapter 5：分析がむずかしい』の含蓄に富む文章は圧巻である。まさに質的研究に潜むピットフォールだと合点がいく。そして 46 ページの『グラウンデッド・セオリー法を「参考にした」と書くことについて』の箇所は，私もすねに傷もつ身として身につまされた。たしかに，ビッグネームをもつ方法論が書かれているかどうかが重要なのではない。何を，どのように行ったかが具体的に書かれていることこそが重要なのである。研究目的と研究の背景，行われた研究方法の整合性があれば，それでよいのだと著者は言い切っている。まったくその通りである。

とにかく読んでみてほしい。読み進めるうちに，著者の厳しくて温かい具体的アドバイスの根底にある質的研究の本質までもが見えてくることに読者はきっと気づかれることだろう。

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2014

2026/09/12 10:03:48